

実習前後に学生が担当希望する子どもの年齢について — 保育士養成校に通う学生の実習における意識変更 —

森 美 利 花
後 藤 永 子
古 市 久 子

目 次

- I 動機と目的
- II 方法
- III 実習生が担当希望する子どもの年齢（第一調査の結果）
 - 1 実習経験のある学生が希望する年齢とその理由
 - 2 実習前と実習後の比較
 - 3 男女差
- IV 年齢にこだわる理由の程度（第二調査の結果）
 - 1 カテゴリの多い順と程度の得点
 - 2 男女差
- V 考察 ～何故、実習生はその年齢を希望したか～
- VI おわりに

I 動機と目的

この研究はある園長の話から始まった。「実習生は、何故皆4歳児を希望するのでしょうか」という質問に、それはどのような理由からであるのか疑問を持ったからである。それが、学生という個人のもつ特性なのか、養成機関の教育のせいなのか。もし、後者のようであるならば、養成機関のカリキュラムを考えるひとつの資料になるのではないかと考えたからである。

保育者養成機関における学生の指導法についての論文は多い。それらは①保育者の資質向上を目指したもの、②保育者の専門性、③保育者を目指す学生の指導、④実習における諸問題、⑤実習の事前事後指導における諸問題などである。毎年のようになされる研究発表であるが、学生が希望する年齢について、その意味や理由を追求したものほとんどない。学生が実習したいと考える年齢があるとすれば、その年齢の子どもに持つ何らかのイメージがあるのかもしれない。それは、学生が子どもに対してどのようなイメージを持ち、またその情報をどこで得たのか、それは正しい情報であったかという問題も含む。

「保育者養成課程に入学する学生がどのような『子ども』イメージをもっているかは保育者としての資質を高める重要な鍵」として、「保育者養成課程入学時における保育者志望動機」と「子ども」イメージの関連を調べた上長は「保育者という職業に対する肯定的なイメージで志望することは子どもに対する肯定的なイメージと結びつきやすかった [1]」という。

実習に行く前に持ったある年齢に対するイメージが実習後にどう変わるのか、その変化を見ることで、保育という専門に対する意欲も見るができるのではないかと。つまり、自分の職業に対する専門性を高めようとする意図がそこに存在するかどうかを見ることのできるかもしれない。「幼稚園教諭の専門性に関する一考察 —保育系学生の意識調査より—」の中で、野呂は大学生が持つ幼稚園教諭のイメージとし

て、①子どもとの関わり・援助に関するもの、②子どもの理解に関するもの、③教育資質に関するもの、④保育者としての基本的姿勢・態度、⑤知識・経験によって培われるもの、⑥実践力に関するものを抽出した [2]。ここでは、学生といえども、これだけの専門性について答えている。本研究では、このような抽象的で高度な質問は避ける。自分の持っているイメージと自分に合っていると思う年齢を答えることで、彼らの専門に対する意識を垣間見ようとする。

また、学生自身の体験の違いが影響してくることが考えられる。佐野は「保育園実習における学生の学びの変容過程に関する一考察 保育所実習と保育実習Ⅱの自己反省調査の分析結果に基づいて」の中で、自己評価が保育所実習と保育実習Ⅱで変わったこと [3] を報告している。おそらく担当を希望する年齢においても、実習体験の有無が関係してくると考えられる。

保育実習前後において学生が持つイメージの変化について、上垣内は「保育実習前後に実習生が抱く子どものイメージの特徴とその変化—1年次幼稚園参加観察実習を手がかりに—」において、実習前と実習後で実習生がイメージするキーワードの違いが見られたという。実習前に抱いていた、単純、幼い、自己中心的、明るい、人なつっこい、弱い、まっすぐ、笑顔、小さい、よく動くということが実習後には消えていた。反対に複雑、発想力、観察力、多様性、一生懸命、深い、豊か、個、思いやり、よく考えている、自己主張が実習前には取り上げられておらず、実習後には取り上げられた [4] という。子どもに対するイメージは明らかに実習体験で変わることがわかる。

学生が希望する年齢について調べることは、養成機関の情報がバランスよく提供されているかという問題にも繋がる。

そこで、学生が希望する実習園での子どもの年齢とその年齢を希望した理由を調査し、分析を行う。

Ⅱ 方法

被験者：名古屋市I大学子ども発達学科学生3年生52名と2年生23名

調査日時：2009年7月・10月・12月、2010年6月

調査内容：第一調査は自由記述でカテゴリを抽出する。質問は「どの年齢の実習をやりたいか。その理由は何か」を尋ねるものであり、自由記述である。自由記述は保育実習を専門とする担当者が二人で読み取って分析した。第二調査は第一調査で抽出されたカテゴリを使用して、学生たちが考えている各カテゴリに対する程度を見る。調査は24カテゴリについて5段階で答えるものである。カテゴリについては結果の表1を参照にした。

Ⅲ 実習生が希望する子どもの年齢（第一調査の結果）

1. 実習経験のある学生が希望する年齢とその理由

保育実習Ⅰと幼稚園実習の前半を終えた学生が希望する年齢、また、それら全部を終えた学生が最後の実習である保育実習Ⅱを終えた、いわば保育経験がある学生が希望する年齢とその理由を見るものである。図1が学生の男女比で、女子がその63%を占める。

彼らの希望する年齢は図2・図3のように、幼稚園実習においては5歳児が最も多くその42%で、3・4歳児はそれぞれ29%である。保育実習においては、0・1・2歳児がもっとも多く、それぞれが約20%ずつである。

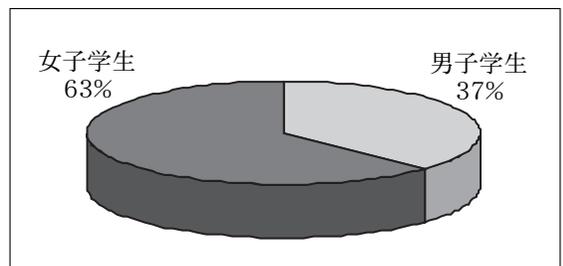


図1 被験者の男女比（2年生）

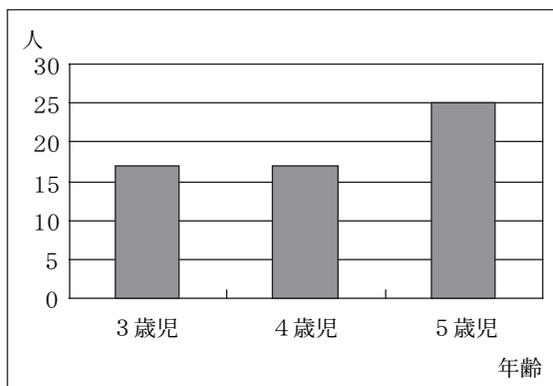


図2 幼稚園実習で学生が希望する年齢

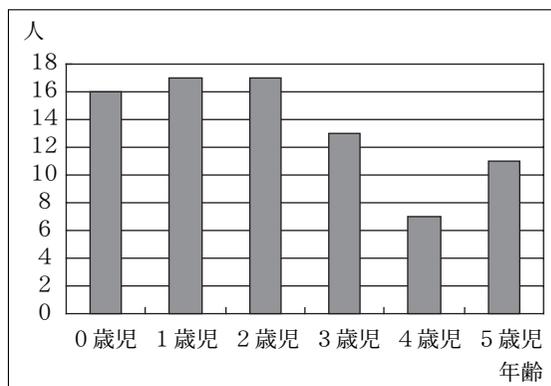


図3 保育実習で学生が希望する年齢

では、どういう理由でその年齢を希望したか、という質問に答えた自由記述をカテゴリ分析した結果が表1である。読み取ったカテゴリは102個で、幼稚園においては68個、保育園においては34個である。

表1 実習で、なぜ、その年齢を希望したか（多い順）

	教育実習を希望した理由
1	以前に体験していない年齢を持ちたかった
2	発達段階を見たかったから
3	今までの経験があるから、同じ年齢を希望
4	3歳児への援助（自信がないから・3歳未満児をみたかった）
	同じ子どもの成長の度合いを見たかった
	保育実習でしか経験できない低年齢
7	話を通じそうだと思ったから
8	自分で行動できる年齢だから
	小学校へ上がる前を知りたかった
10	色々な遊びができる年齢だから
	4歳児のことが知りたかったから
	かわいいから
	男性保育者が受け持つことが多い年齢だから
	幼稚園に入ったばかりの子どものことを知りたかった
15	言葉かけの練習になるから
	部分実習がやりやすい
	一番大きく成長する年齢を見たかった
	自分にあっている
	年齢でなく、自分の趣味を通して子どもを知りたい
	トラブルも多く、保育者が考えて援助する必要があるから
	全ての年齢を見たかった
	園の生活になれてきた年だから
	創造力豊かな年齢だから
	乳児を見たかったから
	自分と係わり合いがない年齢の子を選んだ

それを25個のカテゴリにまとめることができた。もっとも多かったのが、幼稚園・保育園ともに、「以前に経験していない年齢を持ちたかった」であり、約3分の1である。次に「発達の段階を見たかった」で約10%である。3番目が「今まで経験があるから、同じ年齢を希望」が9%と続く。4番目には「3歳児への援助（自信がないから・3歳未満児をみたかった）」「同じ子どもの成長の度合いを見たかった」「保育実習でしか経験できない低年齢」と続く。

次に幼稚園と保育園での希望の特徴をみるために、別々にその順位の5位までを見たものが表2と表3である。幼稚園実習での希望については幼稚園・保育園の合計で示した順位と同じであるが、保育園実習では2番目に「保育実習でしか経験できない低年齢」が2番目に上がってきている。

表2 幼稚園実習でその年齢を希望した理由

	実習を希望した理由	幼稚園
1	以前に体験していない年齢を持ちたかった	19
2	発達段階を見たかったから	7
3	これまでの経験があるから、同じ年齢を希望	6
4	3歳児への援助（自信がないから・3歳未満児をみたかった）	4
	同じ子どもの成長の度合いを見たかった	4

表3 保育実習でその年齢を希望した理由

	実習を希望した理由	保育園
1	以前に体験していない年齢を持ちたかった	14
2	保育実習でしか経験できない低年齢	5
3	発達段階を見たかったから	4
4	これまでの経験があるから、同じ年齢を希望	3
5	3歳児への援助（自信がないから・3歳未満児をみたかった）	2
	同じ子どもの成長の度合いを見たかった	2

2. 実習前と実習後の比較

次に、今まで実習経験がない学生の初めての保育実習前と保育実習後についてみる。図4は、学生が希望した年齢の人数比較である。この図からは二つの特徴が伺える。一つは実習後に2歳児を希望する学生が増えたこと、二つ目は実習前は非常に多かった5歳児が実習後に極端に減少したことである。

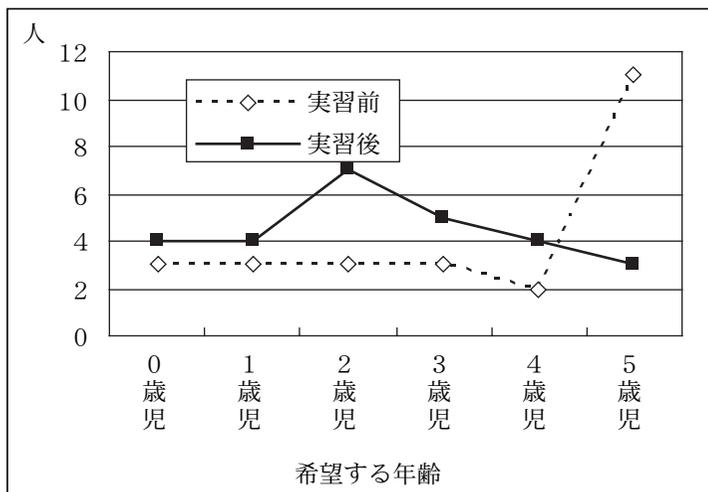


図4 実習前と後の学生の希望

表4 実習で、なぜ、その年齢を希望したか（多い順）

	実習を希望した理由	実習前	実習後	合計
1	色々な遊びができる年齢だから	7	0	7
2	話が通じそうだったから	3	2	5
3	以前に体験していない年齢を持ちたかった	2	2	4
4	かわいいから	1	2	3
5	保育実習でしか経験できない低年齢	2	0	2
6	全ての年齢を見たかった	1	1	2
7	なれないうちは5歳児からが良いと思う	1	1	2
8	発達段階を見たかったから	0	1	1
9	4歳児のことが知りたかったから	1	0	1
10	楽しくやれそうだから	1	0	1

その年齢を選んだ理由を書いている学生が実習前は22%であったが、実習後は61%と、3倍になった。理由について述べたものは表4である。その差は図5に示す。もっとも多いのが「色々な遊びができる」であるが、実習後はそれが全く無くなっている。「以前に体験していない年齢を持ちたかった」というのが続いており、勉強したいと思っていることがわかる。

実習前と実習後の差を見た図5からは、少しだけ変化しているように見えるが、一人か、二人の差である。

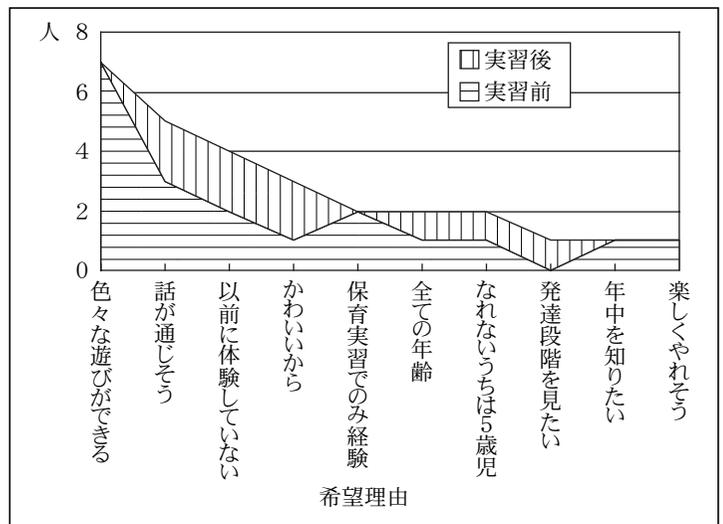


図5 実習前と実習後の希望の差

3. 男女差

選ぶ子どもの年齢が男子学生と女子学生で差があるのかを見たものが、図6である。男女のそれぞれの総数に対する割合で比較している。0歳児と1歳児については女子学生のほうが多く、5歳児については男子学生の方が多い。2歳児までは女子が多く選ぶ傾向があり、3・4歳児では男子学生が選ぶ傾向が多く、低年齢の子どもは女子学生が多く、5歳児になるにしたがって男子学生が希望しているということになる。

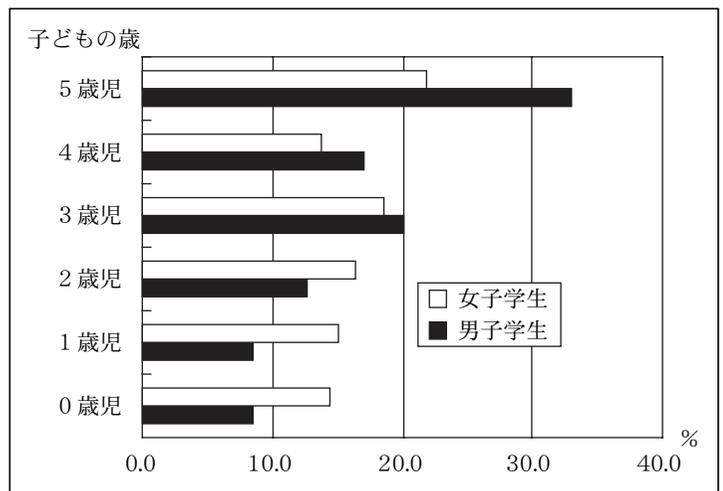


図6 子どもの希望年齢の男女差

Ⅳ 年齢にこだわる理由の程度（第二調査の結果）

1. カテゴリの多い順と程度の得点

どうい理由でその年齢を希望したかを表5に書かれた24個のカテゴリにまとめ、その希望の強さの程度を5段階で尋ねた。このカテゴリは、第一調査で抽出されたカテゴリをまとめたものである。もっともその度合が弱いものを1点、もっとも強いものを5点とし、カテゴリ毎の得点の合計を調べてみた。その結果が図7である。また、各カテゴリ毎の得点の合計を希望した年齢別にみたものが図8である。

希望が最も強いものは、「以前に体験していない年齢を持ちたかった」と「かわいいから」という理由であった。「同じ子どもの成長の度合いを見たかった」がこれに続き、「色々な遊びができる年齢だから」「発達段階を見たかったから」「自分で行動できる年齢だから」も希望が強かった。この結果より、実習を重ねるにつれ、子どもの特徴を理解し、また実習の目的を持って希望する年齢を決めていることがわかる。

表5 希望の強さを尋ねる24のカテゴリ

	実習を希望した理由
1	以前に体験していない年齢を持ちたかった
2	発達段階を見たかったから
3	今まで経験があるから、同じ年齢を希望
4	3歳児への援助（自信がない・3歳未満児をみたい）
5	同じ子どもの成長の度合いを見たかった
6	話が通じそうだったから
7	自分で行動できる年齢だから
8	小学校へ上がる前を知りたかった
9	色々な遊びができる年齢だから
10	年中のことが知りたかったから
11	かわいいから
12	男性保育者が受け持つことが多い年齢だから
13	幼稚園に入ったばかりの子どもを知りたい
14	言葉かけの練習になるから
15	部分実習がやりやすい
16	一番大きく成長する年齢を見たかった
17	自分にあっている
18	パワフルだから
19	トラブルも多く保育者が考えて援助する必要があるから
20	全ての年齢を見たかった
21	園の生活になれてきた年齢だから
22	創造力豊かな年齢だから
23	自分と係わり合いがない年齢の子を選んだ
24	その他

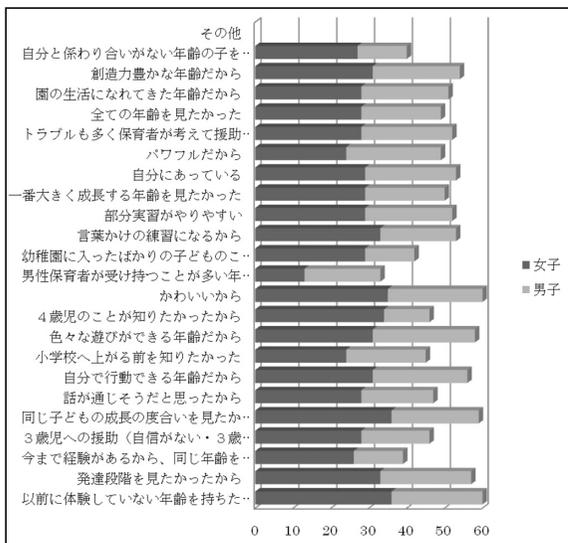


図7 実習を希望する理由の強さ

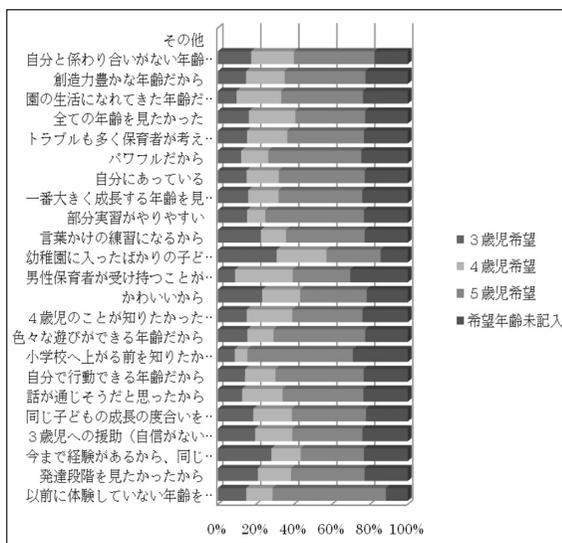


図8 実習希望年齢による比較

(カテゴリに関しては表5の内容と同じである)

2. 男女差

男女差について見てみると、多くのカテゴリで、あまり差がないことが分かる。強いて言うならば、「今まで経験があるから、同じ年齢を希望」「4歳児のことが知りたかったから」「幼稚園に入ったばかりの子どものことを知りたい」「自分と係わり合いがない年齢の子を選んだ」というカテゴリについて女子学生よりも男子学生の希望が弱い。これは、5歳児を希望する男子学生が多いことにも繋がる結果といえるのではないだろうか。

また、「男性保育者が受け持つことが多い年齢だから」については、男子学生の希望が圧倒的に強かった。やはり、男子学生にとっては男性保育者の役割について関心が強いのであろう。

V 考察 ～何故、実習生はその年齢を希望したか～

1. 子どもの発達の姿を知りたいと思う

約3分の1が「以前体験したことのない年齢であるから」を希望していたのは、色々な年齢の支援を学ぼうとする積極的な心の現れであろう。2番目が「発達段階を見たかった」という項目であるが、これも、1番目の体験していない年齢を持つことと同じことと考えることもできる。だとすれば、学生は発達の著しい子どもの年齢のそれぞれの姿を見たいという積極的な気持ちで実習に臨んでいたと思われる。

2. 自分にとってやり易い考える

5歳児を選んだ学生は「話を通じそうだったから」「多くの色々な遊びができる年齢だから」「なれないうちは5歳児がよいから」と、自分のもっている力に近いところでやっていきたいと考えている。それが、5歳児であると話を通じるであろうと思った結果であろうし、一緒に遊ぶにも、3歳未満児に対するような特別な配慮も軽減されるであろうという気持ちからであろう。しかし、実習に行って小さな子どもでも十分コミュニケーションがとれるとわかって、実習後には減少するという、体験不足からくる選び方だったのではないだろうか。

3. 保育所でしか体験できないことを学ぶ

幼稚園は基本的に3歳から、もしくは4歳からである。したがって0・1・2歳児の経験はできない。未満児を担当したいと考えるのは保育者を目指すためには当然の希望と考えられる。本調査においても、その傾向が見られたのは喜ばしいことである。

4. 同じ子どもの成長をみたい

また、以前関わった子どもと同じ年齢の子どもを希望する学生がいた。これは、一人の子どもの育ちを丁寧に見ていきたいという保育者になるものにとって相応しい気持ちではなかろうか。

5. 男性保育者として知りたいこと

研究対象となった大学には約半数の男子学生がいる。「男性保育士が受け持つことが多い年齢だから」ということで5歳児を希望しているが、これは正しい解釈とはいえないのではないと思われる。それはおそらく彼らの誤りのみならず、現場においても少し誤解されている認識かも知れない。いまやもう、男性の育児参加は家庭において、生後、いやその前から始まっている。ましてや、育児を専門とするプロであることを考える必要があるのではないか。

Ⅵ おわりに

学生が実習に行く前には実習事前授業が行われる。ここでは、実習に備えて必要な理論や技術を学ぶ。また、「保育原理Ⅰ」「保育原理Ⅱ」「養護原理」「教職概論」「保育課程論」「保育方法論」等の科目も履修しなくてはならない。このことから、学生は当然のことながら実習に行くときには必要な知識が身につけているはずである。

しかし、実際に実習に行くと、学生はその知識や技術を十分に活かすことができずに戸惑うことが多い。

実習の目的は、これまでに学んだ理論を実践の場を通じて実感することにある。そして、保育の現場を体験することで、授業では味わえない臨場感によって子どもや保育について新たな気づきを得ることにある。

学生が初めて実習に行くときは、子どもと日常の中で触れ合った経験や、高等学校までの職場体験やボランティアでの経験から、「子どもといると楽しい」「子どもはかわいい」というイメージを持って臨む場合が多いと思われる。しかし、実際に保育の現場で子どもと接してみると、思いどおりにいかないことがたくさんあり、「楽しい」「かわいい」だけでは済まされないということに気づくだろう。第一調査の結果で実習後にその年齢を選んだ理由を書いていない学生が多くなっていたのも、実習を経験したことで保育は単に「楽しい」だけではないということを知り、理由も簡単に言い表せなかったからであると思われる。

実習先の園が望む実習生は、「子どものありのままの姿を認めることができる人」「子どもとともに生活と遊びをつくり出すことのできる人」「保育者として自分を高めることができる人」である。保育者の仕事は、かけがえのない命を預かり、一人ひとりのその子らしい成長・発達を助けることである。そのためにも、子どもが安心して自分らしさを発揮でき、自分には自分の価値があるという自己への信頼が築けるように、その子のありのままの姿を認め、受け入れることが必要である。また、その子らしく成長・発達するためには、さまざまな援助や指導が必要で、見守るのか、援助するのか、その時々判断していくのが保育であり、深くしっかりと子ども理解が必要になる。そして、保育者の話す言葉や行動のすべてが、子どもにとっての行動モデルとなるため、保育者には豊かな人間性が求められる。要するに、保育者になるために、このような資質が求められるのである。

実習生の考える保育指導案は、子どもにとって「楽しい経験」となるように考えることが多い。しかし、現場では子どものために思い、子どもにとって「望ましい経験」となる内容を考える。このことに気づき、

課題を見つけて実習に取り組むことが大切であり、実習の目的を果たすことに繋がるのではないだろうか。

実習では、授業で学んだことを実際にやってみても、予想もしなかったさまざまなことに出会い、「どうしたらいいのかわからない!」と悩むに違いない。しかし、この「失敗」を「課題」と考え、改善していくことが学びに結びつく。授業で学んだことと、保育の中での実際は、その両方が一体となってはじめて、保育者としての専門性が養われるのではないだろうか。

引用文献

- [1] 上長然：「保育者養成課程入学時における保育者志望動機「子ども」イメージ」、日本発達心理学会第21回大会論文集、2010年、p.192.
- [2] 野呂未：「幼稚園教諭の専門性に関する一考察 ―保育系学生の意識調査より―」、日本保育学会第62回大会論文集、2009年、p.724.
- [3] 佐野美奈：「保育園実習における学生の学びへの変容に関する一考察 保育所実習と保育実習「の自己反省調査の分析結果にもとづいて」、日本保育学会第61回大会論文集、2008年、p.724.
- [4] 上垣内伸子：「保育実習前後に実習生が抱く子どものイメージの特徴とその変化 ―1年次幼稚園参加観察実習を手がかりに一」、日本保育学会第59回大会発表論文集、2006年、p.370.

参考文献

- 田中まさ子他：「幼稚園・保育所実習ハンドブック」、みらい、2008年
- 戸田雅美：「保育内容総論の探求」、相川書房、2005年
- 百瀬ユカリ：「よくわかる保育所実習」、創成社、2010年
- 「幼稚園教育要領〈平成20年告示〉」、フレーベル館、2008年
- 「保育所保育指針〈平成20年告示〉」、フレーベル館、2008年

受理日 平成22年9月30日

